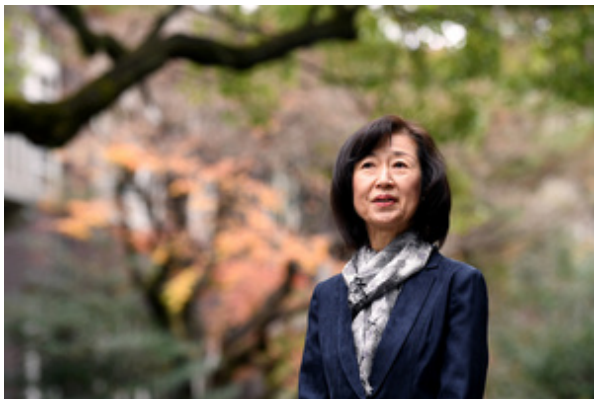



人種も社会的に作られた 分類したがる私たちは差別をなくせるのか

有料記事

聞き手・池田伸壹 2023年1月4日 6時00分



竹沢泰子・京都大学教授=京都市左京区、筋野
健太撮影 

差別や分断はどのように生まれ、なぜなくならないのか。長年、人種差別の問題を見つめてきた文化人類学者の竹沢泰子さんは、「社会的に作られた」考え方にこそ注意を促します。私たちは、なぜ何かを分類したり区別したりしてしまうのか。社会を前に進めていくには、どうすればいいのでしょうか。

たけざわ・やすこ 1957年生まれ。
筑波大学助教授などを経て京都大学人文科学研究所教授。近刊に「アメリカの人種主義」。共編著に「人種神話を解体する」（全3巻）。

——なぜ、世界で差別が続き、分断が起きているのでしょうか。

「いま起きている差別や分断には色々な種類がありますが、共通しているのは、現在だけを切り取っても理解できないことです。欧米での移民・難民をめぐる問題、グローバルサウス（主に南半球の発展途上国）の貧困や飢餓、環境破壊といった問題も、いまだけ、起きている空間だけを見ても理解できません」

「旧宗主国や先進国が、植民地主義やグローバル資本主義のもとで長年、労働力や資源を搾取してきたことが一つの要因です。私たちが捨てたゴミが輸出されたり、安い服が奴隷的な労働環境で生産されたりと、日本も無関係ではありません」

——人種による差別も、世界中で残っています。

「そもそも人間を、皮膚の色などの外見的な特徴で複数の人種に生物学的に分類できるとする考え方は、現在では科学的に否定されています。そうした特徴は人類がアフリカを出たあと各地

の環境に適応する過程でできたもので、あくまでも人類は連続体であり、単純にいくつかには分類できないことが遺伝学や生物人類学などの発展で明らかになっています。能力・気質に関する特性が、世代から世代へと集団単位で継承されるというのは誤った考え方で、社会的に作られたものです」

——日本人は「黄色人種」ではないのですか。

「多くの日本人や東アジア人の肌が黄色だという認識も、近代以降に欧米から入ってきたものです。例えば1600年前後の南蛮びょうぶを見れば、日本人の女性や侍の肌は、南蛮人と呼ばれたスペイン人やポルトガル人より白く描かれています。他方、屋外労働者の肌は茶褐色で、ヨーロッパ人は衣服や髪、鼻や目の形で描き分けられており、肌の色が『ちがい』の指標ではありませんでした。宣教師たちもローマに『日本人の肌は白い』と報告しています」

「黄色いとされるのは明治以降です。ヨーロッパには『白』が善・清浄を、『黒』が邪悪・汚れを意味する用法が、すでに14世紀にありました。『黄色』には伝統的に、嫉妬深い・臆病・反逆者といったネガティブな意味があります。日本が欧米から受容した人種分類には、白人を最高位に、黒人を最下位に置き、その間に黄色を置くという差別的な序列があったのです」

「ですから日本人が『黄色』というのは、時間軸でも近代以降ですし、空間軸でも欧米から発信されたものに過ぎません。アフリカやアジアには、日本人や中国人を『白い』、ヨーロッパ系を『赤い』と認識する集団もあります」

——科学的とされていた人種分類は、どうできたのでしょうか。

「啓蒙（けいもう）主義の時代のヨーロッパで始まりました。当時の博物学者たちは、あらゆるものを色や形、大きさで分類しました。しかし、人間の分類の方法や呼称には、ユダヤ・キリスト教の世界観と自民族中心主義的な考え方が反映されています。人種概念は、世界諸地域での先住民支配や、アフリカ人を使った奴隷制などの正当化に使われました」

——そもそも、なぜ私たちは物事を区別し、分類するのですか。

「人間は多種多様な情報を、視覚や聴覚といった五感などで受信し、分類することで整理しています。脳の中に数多くの箱のようなものをつくって情報を投げ込み、比較して理解したり、予測したりする。見知らぬ世界のことは大きく分類し、よく知る世界では細かく分類する。効率的で便利な情報処理システムで、人間が普遍的に持っている能力です」

「しかし、何をどのように分類・区別するかは、後天的です。植物や動物、雨や雪などをどう分類し、名づけるかは、文化圏によって異なります。人間を分類する場合、肌の色などの外見で区別するとは限りません、儀礼や慣習で、自集団と他集団を区別する社会もあります」

「分類したそれぞれの人間集団に固定的な偏見を抱きがちですが、それらは私たち自身の中にある、なりたくないもの、自分の中から排除したいもの、あるいは逆に、憧れるもの、取り入れたいものを投影しているのです」

——見た目も違うので、分類に科学的根拠があると思いがちですが。

「目で見て分類するというのは、解剖学や遺伝学が発達するまでは博物学の基本でしたが、今は違います。そもそも人間の外見は実際には多様で連続体です。それを無理やり分類して、名付けるのは、時代と社会の産物です。100年前、米国のジャーナリストのウォルター・リップマンは『人間は見てから定義するのではなく、定義してから見るのだ』という言葉を残しました」

——「日本には人種差別がない」という人がいます。

「大きな誤解です。環大西洋で特徴的な皮膚の色による差別だけではなく、東アジアでの人種差別は、『血』や出自をめぐる社会言説を中心に構成されるのが特徴的です。在日コリアンや被差別部落、アイヌへの差別、くわえていわゆる外国人労働者らに対する差別なども問題です。その意味では、これらの少数派集団も『人種化』され、差別を受けてきたといえます」

「ただし、太古から普遍的に存在するものではありません。『血』や出自にもとづく差別は、社会的分業が発達し、権力を持つ支配者を頂点とするヒエラルキーが形成され、宗教組織の権力が強くなった中世以降に顕在化したと捉えています」

——差別をなくしたり救済したりする取り組みは、それなりに整ってきたという見方もあります。

「分断を解決するには、現状を把握する視座を、どこに置くのが重要です。ある民主主義国家での差別を考える場合、現状だけを見れば法的差別は大幅に解消され、経済的・社会的な支援が設けられ、このうえ何を要求するのかと感じるかもしれません。しかし実際には、差別は親の世代だけでなく長い歴史の中で積み重ねられており、多数派や支配的な立場の人々は、自分たちに有利な状態を維持しようとします。過去に差別を受けた少数派集団の子孫は、職業・教育・資産・居住区・食物や医療へのアクセスなど、さまざまな領域における『資本』がしばしば異なり、不利な状態が再生産されます。ですから、差別は過去の話だから時間が経てば自然解消される、というものではないのです」

——分類・区別してしまいがちな私たちは、目の前にあるかもしれない差別の存在に向き合い、なくすことができるのでしょうか。

「あくまでも私たち次第です。私は神戸出身で、差別的な事件のニュースなどで気持ちがめげそうになると、阪神・淡路大震災の時のことを思い出します。ルーツを問わず被災者として助け

合い、朝鮮人ら少数派の人が殺された関東大震災の二の舞いになることはなかった。人々は歴史の教訓を生かし、過ちを繰り返さなかったのです。だからと言ってその後、理想郷が出来たわけではありませんが」

「私が主に研究対象にしている米国では、『Black Lives Matter』という運動が大きな変化をもたらしました。私は『黒人の命を粗末にするな』と訳していますが、黒人や他のマイノリティーだけでなく白人たちも声を上げ、連帯することで、さまざまな変革をもたらしつつあります。『差別はなくなるから仕方ない』と声を上げなければ、悪循環が続くだけです。沈黙は、差別に加担することです」

「いま、日本社会でも『多様性』や女性の積極的登用という言葉がよく聞かれるようになりましたが、マイノリティーの数だけが増えても、意思決定の中に入らない限り、社会は容易には変わりません。意思決定の同質性が高いと、既得権を握る一部の人には心地よい空間であっても、不公正や不平等、排除が再生産されやすい構造です。それは、本当は誰にとっても生きにくい社会です。差別をしない・されない世界、全ての人にとってより生きやすい社会のために、一つ一つ差別の芽を摘んでいくという、私たち一人一人の決意が必要だと思います」（聞き手・池田伸壹）

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.